『國民新報』1939年10月8日

[主張]　戰死者と吾等　―戦没將兵の遺族たれ！―

　この、からのがして、そのに、しめやかななどのがられた。りがゝりのやあるはしばしをめて、のにとのをしてたのであるが、のとふがかでないので、りするもあつたのはにであり、にがをてゝるのをると、のさへもつた。なんとかしてれなくにをしるにしたいものである。

　にとつてはにするにれるがなかつた。はゞがめてなのである。しながらのとにくののしめるをる、はのするとがなるをて、にくののとしみとによつてはれたるかをみじみぜざるをない。のはのによつてられ、ののびはののしみによつてかはれてるのだ。これはでもでもない。そのりである。しからばはこれのびそのにしてうすればいだらう。そのをつてはとのをさう。そのにしてはあらんりのはりとけのをばさう。それはのことであるがしそれではりない。はのをしげねばならぬ。にりいてもをんでものをせねばならぬ。をしよう。あらゆるをし、をいしばつてししよう。をはう。のをらう。してはいつなんにもにつをしつゝ、のたるを、ありあるにてよう。かくてこそや、そののきにへることがる。

　々はかのをしたにぎない。としみとをてにしたことがりになぎる。かのでそれだけのひをしようではないか。それはすべてののになることだ。こののにしかすることのないのなさをば、のにしてるものをめけることによつてはうではないか。そしてのをば一にけたでかうではないか。にすべきにきてるのにおいてりである。